

社
會

峰



11. 12月合併號
第4卷 第6號
通卷 第31號

目 次

11.12月合併号

卷頭の言葉

正法を見る者は仏陀を見る

さきやかな体験の中から

共に咲く喜び

木村義賢

煩惱の渦潮の中に

榎本蓮子

続・美女と求道者

芋畑の中での

仲穎隆

信仰相談室

宗門蘇生の要道とは

日高白象

法華經講鑑の集い	34
編集後記	35
釈尊の成道会に際して	34

31 24 17 6 4

表紙題字・身延山法主藤井日静猊下
表紙写真・インド靈鷲山へ渡つた身延山金剛の釈尊像

仏陀を見る

「汝等よ、たとえ人あつて、私の衣の裳（もすそ）をとり、後より隨行して、私の足跡をそのまま踏もうとも、若しその人の心が、正法の中に住していなかつたならば、その人は私から遠く離れているものであり、私もまた、その人から遠く離れている。何故ならば汝等よ、その人は私のそばに居りながら、正法を見ていないからである。正法を見ない者は私を見るることは出来ない。私は、たゞ正法の中に住しているのである」

それは何時ものように静かな柔しい言葉でした。然しその言葉の中には、一片の妥協も許さぬ厳しさがあふれています。「正法を見ざる者は我れを見ざるなり」という此の言葉ほど、釈尊の教えに従わんとする人々にとつて、これほど厳しいものはありません。

時に、私たち自身の日常における信仰態度をふりかえつてみるならば、形だけお寺や靈跡を参拝したり、分に応じた寄附をしてみたところで、それだけでは仏教徒ということは出来なくなつて来ます。また先祖の供養や唱題修行の数を重ねてみたところで、正法に住しない限り、仏陀の命に生きた仏弟子とは言われなくなつて来ます。

正法を見る者は

何故ならば釈尊みずから、たとえ釈尊の衣の裳をとつて隨行し、その足跡をそのまま踏もうとも、と指弾されているからです。では、どうして仏弟子として釈尊にまみえることが出来るのでしょうか。釈尊は次のように語られました。

「汝等よ、たとえ人あつて、私より去ること遠き彼方に住すとも、若しその人の心が正法の中に留つてゐるならば、その人こそ實に私のそばにいるのであり、私もまた、その人のそばにいる、何故ならば汝等よ、その人こそ正法を見ているからである。正法を見る者は私を見ることが出来る。私は、たゞ正法の中にのみ住してゐる」

「私たちは釈尊より去ること、時も二千数百年、處も遠き幾万里。

インドの仏跡の一つだに、参拝した者は稀でしかありません。然し「正法を見る者は我れを見る」という釈尊の金言の如く、身心ともに正法の中に住する時、幾千年の時間も、幾万里の距離も一擧に飛躍して、本仏の釈尊にまみえたてまつることが出来るのです。釈尊の因行果徳のお題目の中に、身も心も投げ入れた時、常住此説法される本仏釈尊の大慈悲の中に、釈尊と共に生きる同行二人の、みずからの不滅の命の尊ささえも見出しが出来るのです。

ささやかな体験の中から

共に咲く喜び



立正大学四年 木村義賢

1

者小路実篤のそれなのです。

でかみしめたことでしょう。

朝食の時のことでした。おかげ

人間の世界でも、昔から、

を盛つた焼物のうつわに、二つの
ボタンの花が、美しく描かれてい
ました。絵のことには、

私は、配色のことなつた二つの
花が、仲よくならんでいるその絵

「十人十色」

柄と、その文字とを見較べながら
静かな深い感動にひきずりこまれ
て行きました。

といわれているように、私もふ
くめて、種々様々な人々が、種々
様々に生きています。一人一人の

「共に咲く喜び」

という文字が、薄い墨で註され

いました。よく見かけられる武

喜び…………▽

何度、私はこの言葉を、心中で

場で働き、集団や国家、世界を形

成しています。

然し、そういう中につつて、心から「共に咲く喜び」をわかつあつてゐる人々が、果して、どれほどいるでしよう。

2

これは私の、さうやかな体験で

口にするのもおこがましい、或は恥しいことなのですが……私の学校の先輩にQという学生がいました。どういうものか彼は、皆から毛虫のように嫌われていました。

今から考えると、まことに憤慨に堪えないことですが、憎しみや怒りや、閑々の情をまぎらわせる

私は、どれほどQを嫌い、どれほどQを憎しみ、Qを怨んだことを知れません。或る時は、

へもう一緒に暮すのは我慢出来ない。明日にでもこの家を出よう

その頃のお経やお題目が、憎しみや、恨みや、怒りの一念にもえたお經であり、お題目であつたことを、今、思い起すだにも、身も

家で生活していただけに、苦しめられ悩まされることも、また格別でした。それは／＼苦汁をなめる

る時は、
へ今度こそ、奴をぶんなぐつてや
るんだ！

ような日々の連続でした。

今日では自由主義、民主主義の風潮が浸透しているようにみかけられます。まだ／＼一部には、封建的な色彩も残存しているようです。彼と私の関係もまた、何が

と怒りにふるえたこともあります。然し周囲のことや前後のことを考えあわせると、それを決行することも出来ず、屈従、忍従の中に、たゞ閑々として日を過していました。

と怒りにふるえたこともあります。

こうした或る日のこと、読誦す

を具足せしめたり。

るとはなしに、法華經第十二の提婆達多品の訓讀を讀んでいる中、

突如、背筋も凍るような驚きを覺えずにはおられないお經文が、私

の両眼の中に飛び込んで來ました

それは、今まで何百辺も何千辺も読んで來たお經文なのですが、この時ばかりは、文字が生きものとなつて、わなゝくばかりに、私の心をゆりゆすぶつたのです。それは、

等正覺を成じて、広く衆生を度すること、みな提婆達多が

善知識によるが故なり

というお經文でした。

御承知の通り「釈尊にさえも九横の難あり」と申されています。

その難の中には、提婆達多の悪逆なる迫害が數えられています。

曾つて提婆達多は仏弟子でしたしかも釈尊とは、イトコ同志とい

う血縁の間柄でした。それにもかゝらず、時のマカダ国王の権勢をかりて、釈尊の教團の分裂破壊を工作し、遂には、再三にわたつて釈尊を殺害しようとまでも試みました。それは執拗きわまりない

迫害でした。王威をかりたものだけに傍若無人、暴逆非道の慘状をきわめたものでした。

このため提婆達多は、後世のす

べての仏教徒からも「五逆・誹謗

正法の極悪人」という烙印をおさ

れてしまつたわけですが、然しながら當時、被古者立場にあつた

はずの釈尊御自身は、こうした迫害の中にあつてさえ、Q先輩に対

した私のように、憎しみ返すという恨らみの炎を、えん／＼ともやすということは、微塵もなかつたのです。

むしろ釈尊は、御自分に仇する提婆達多の悪逆をまのあたりにされても、また鮮血ほとばしる傷を

提婆達多が善知識によるが故に、我れをして六波羅蜜、慈悲喜捨、三十二相、八十種好、紫磨金色、十力、四無所畏、四攝法、十八不共、神通道力

負わされた時でさえも、決して怒ることなく、静かに微笑をたゝえながら、

ざめて、私のもとへ帰つて来るであらう。

謝の念を、彼に捧げたい。

「彼ほどの反逆にあいながらも、私は少しも動搖することはなかつた。彼にそゝのかされて去つて行つた大部分の仏弟子以外の者も、

んではならない。怨んでもならぬ。憎んだり、怨んだり、怒つた

感謝の念を捧げることが出来るのも、決して偶然のこととは思われない。

私と同様に動搖することはなかつた。それは私の不抜の正覚と、私の説くところの正法の堅固さを、つぶさに立証すると共に、不放逸、常精進の道念を、ます／＼とぎすませる最高の、求めて得られない試練であつたのだ。

私は、何時も變らない静ひつな心において、むしろ彼こそ、逆縁の大恩人と感謝している。

彼こそ、逆縁の恩というものを私をはじめ、仏弟子たちに、そして後世の無量の人々に対して、身

をもつて示してくれたのである。私は、私個人の立場だけでなく

この因縁をもつて今生、私は身をもつて阿私仙人の正覚を悟る」

また彼にそゝのかされて、去つて行つた多くの人々も、やがてめ

て、蓋し今、こうして彼に限りなき感謝の念を捧げることが出来るの

も、決して偶然のこととは思われない。

とが出来、阿私仙人の如く正法を説き、広く無量の人々を活度することが出来るのである。

この時、阿私仙人は今度は逆縁の立場から提婆達多となつてあらわれ、曾つて私が身をもつて阿私

仙人に給仕したように、提婆達多もまた、身をもつて私と私の教団

を迫害し、正覚と正信の、動と不動を後世にまでも示すべく、敢て試みられたのである。

その故に、提婆達多は今生の罪の報いによつて無量劫の間、墮地獄の苦しみをうけようとも、必ずや未来世において天王如来という仏陀となり、提婆逆縁の恩を感じる後世の人々のために、順縁の無

量の正法を説き、また無量の人々を活度して行くであろう。

今私のには、提婆惡逆の現身に過去世においては阿私仙人という仏陀の姿が、未来世においては天王如来という仏陀の姿が、二重写し三重写しになつて、共に見るこ

とが出来る。これが三世順逆不二の恩を思う仏陀の立場である」と仰せられたのでした。

前述の提婆達多品の、お經文の意味を解釈するのに、少々長くなつた所であります。また同時に、このことが、私自身をして僧道へ引き入れて行く、大きな契機となつたことも確かです。

二という立場から、現在をみつめでおられたのです。

だからこそ、残虐きわみなき悪逆無道の提婆達多に対しても、限りなき感謝を捧げ、限りなき慈眼をそぐことが出来たのでしよう。

以上が、その時、提婆達多品の一節の經意にふれて、教えられたすべてであり、わなゝくような驚きと、喜びを覚えずにはおられなかつた所以であります。また同時に、このことが、私自身をして僧道へ引き入れて行く、大きな契機となつたことも確かです。

昔から「釈迦に提婆」という諺

もあるように、釈尊は極善の代表者とされ、提婆達多は極惡の代表者とされています。しかも両者は

師弟の関係、イトコ同志といふ深い間柄にあるのです。こゝに人間

の深い不可思議な「つながり」を感じざるを得ないものがあります。

この時以来、私は「因縁」「因果」「三世縁起」という釈尊の教えに魅せられてしまいました。

日蓮大聖人の御歌といわれるものに、

おのずから
よこしまに

降る雨はあらじ

風こそ夜半（よは）の
窓をうつらめ
というのあります。

風が全くなければ、雨は天からまつすぐに降るでしょう。風があればこそ、まつすぐに降るべきは

ますの雨も、よこしまに降つて来るのです。風という因縁によつて、或る雨粒は窓に、或る雨粒は屋根に或るものは、窓をうつ雨粒となるのです。

これを人間の側にみると、

Aという人も、Bという人も、Qという私の先輩も、雨粒の替えのようです。因縁によつて此處にあるのです。

世の中のすべてのものは、限り

なき時間と、限りなき空間における、無尽の因と縁とによつて成り立つています。

私たちが、雨粒にむかつて、「お前は何故、私の家の雨戸を打つのか」

と怒つてみたところで、雨粒の知つたことではないようだ。Qという先輩に、「何故お前は、そんなにひねくれた根性なんだ？」

と責めてみたところで、Q自身返答のしようもないでしょう。何故ならば、彼自身が好んで、そうなつたのではなく、因縁の累積によつて、次第に、そのような性格にさせられたものであるか

らです。

こうした因縁所成の事実を思うならば、どうしてQ一人を責めることが出来ましよう。

提婆達多品を拝読すれば、釈尊もまた、因縁、縁起所成という三世一俱の慈眼、順逆不二の叡智をもつて、提婆達多に対されていました。

そして釈尊の、この叡智と慈愛によつてのみ、極悪の者も、すべての人々も、救わられて行くのです。この釈尊を仰ぎ、恋慕・渴仰し、釈尊と共に自由の世界に遊ぶことが出来るのです。

提婆達多品の中の、悪人成仏の一
段が、

未来世の中に、若し善男子、善女人あつて、妙法華經の提婆達多品を聞いて、淨心に信敬して、疑惑を生ぜざらん者は、地獄、餓鬼、畜生に墮ちずして、十方の仏前に生ぜん

所生の處には、常に此の經を聞かん。

若し人、天の中に生るれば、勝妙の樂を受け、若し仏前にあらば、蓮華より化生せん。

釈尊の因行果徳の二法は聞かん。若し人、天の中に生るれば、勝妙の樂を受け、若し仏前にあらば、蓮華より化生せん。

と結ばれているのも、この故であります。

「妙法蓮華經の提婆達多品を聞いて……」といふのは提婆達多品の中

に示された釈尊の、三世徹貫する順逆不二の叡智と慈愛を、自分の心に受けとめるということです。この叡智と慈愛は、そのまま色々も変えず、一分も漏らすことなく、お題目として私達にさすげられています。大聖人が觀心本尊妙の中で、

釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足す

我等この五字を受持すれば自然に彼の因果の功徳を

譲り与えたもう

と仰せられているのは、このこ

とです。

従つて、お題目を唱える私達はその功德をうけて、提婆達多に対

した釈尊のような、大らかな眼を
大らかな心を、大らかな愛を、も
つようにならねばならないと思いま
す。

「あいつは嫌いだから嫌いだ」

ということであれば、法華經を
信仰しない普通の人々と、何ら変
るところはありません。靈験、利
益だけが法華經信仰の功德ではな
いのです。釈尊のような心をもち
その心で日常、人ともまじわり、
心なき木にも、草にも、接せられ
るということこそ、まことの信仰
の功德と申せましよう。

然しながら、お題目を唱えてい

る人々の中にも、「大らか」でな
い人たちが、あまりにも多くみか
けられます。

私も、その一人です。なかなか
人を素直に恕（ゆる）すことが出
来ません。そうと道理では百も承
知していながら、感情が先きにた
ち、何時も反省、懺愧の念が後か
ら追つているような始末です。凡
夫の凡夫たる所以であります。

だからこそ釈尊は、法華經を末
法に留められ、大聖人は乙御前御
返事の中まで、

身軽法重、死身弘法と述べて
候はば、身は軽るければ、人
は打ちはり、にくむとも、法
は重ければ、必ず弘まるべし
法華經弘まるならば、死斃か
えるならば、その深さは果てしな
くつゞき、あおけば、また果しな

く高くそびえ立っています。

その山を、自分自身の力で取り
払うには、あまりにも荷が重もす
ぎる、というよりも、むしろ不可

能に近く、罪の山を前にして、手
をこまぬき、たゞ涕泣するほかは
ありません。

華經が重く尊いことが強調されており、また呵責誘法滅罪鉢に、

過去の誘法、我が身にあること

と疑いなし。この罪、今生に消さずば、未来いかでか地獄の苦をば免るべき。過去遠々の重罪をば如何にしてか、みな集めて、今生に消滅して、

未来の大苦を免れんとかんがえしに、当世、時に當つて誘法の人々、国々に充満せり。

その上、國主既に第一の誘法の人たり。この時、この重罪を消さずば、何時の時をか期すべき。

開目鉢の中では、

生死を離るる時は、必ずこの

重罪を消し果てゝ出離すべし功徳は浅軽なり、これらの罪は深重なり。

權經を行せしには、この重罪いまだ起らず。鉄をやくに、いとうきたわざれば瑕かくれてみそす、度々せむれば瑕あられる。麻のみをしほるに、つよくせめざれば、油少しが如し。

今、日蓮、強盛に國土の誘法を責むれば、大難の来るは、過去の重罪、今生の誘法に招き出せるなるべし。

鉄は火にあわざれば黒し。火とあいぬれば赤し。木をもつて急に流れをかけば波、山の

如し。ねむれる獅子に手をつければ大いに吼ゆ。

また同鉢に、

我れ、並に我が弟子、諸難ありとも、疑う心なくば自然に仏界にいたるべし。天の加護なきことを疑はざれ、現世の安穩ならざることを歎かされまた曰く、

日蓮が流罪は、今生の小苦なれば歎かしからず。後生には大乗をうくべければ大いに悦ばし。

と仰せられてゐるのです。

その心は、今生における不信、

誇法の人々の姿を見るにつけても

その姿こそ、無量深重なる罪業の

因となつた過去世における、計り

難き自分自身の不信、誇法の姿を

写し出すものとして、過去世にお

ける自身の不信、誇法の罪を懺悔

する底において、今生の人々の不

信、誇法をいさめ、その艱難なる

実践の中に、滅罪成仏の悦びを、

信誇ともにわかつられたのでした。

朝夕、読みならわしている開經

偈の文に、

若しは信、若は誇

ともに仏道を成す

三世の諸仏

甚深の妙典なり

生々世々植遇し

頂戴せん

という有名な言葉があります。

この言葉こそ、三世にわたる信誇

不二の実践を示すものでなくて何

でしょう。

思うに、大聖人の歩まれた道は

罪を知りて罪にむせぶ者の、歩ま

ねばならぬギリギリの道でした。

そしてこの道は、私たちもたどら

ねばならぬたゞ一つの道なのです

人間は二つの道を同時に歩くこ

とは出来ません。右か左か、あれ

か、これか、とどんなに迷つてみ

たところで、法華經こそ人として

歩むべき最高の道と知つた以上、

大聖人の歩かれた道より以外に、

私たちの歩く道はないのです。た

たとへ歩く足は遙くとも、或はつ

ずき、或はころび、よろ／＼と、

よろめきながらも歩く一路は、三

世一俱、信誇不二、順逆一如の唱

題実践の道なのです。

6

もとより私には、学徳も行徳も

なく、人を指導感化する力さえあ

るはずはありません。

然し、この道を知つてからは、

通学の間に、お寺の法務の暇に、

街々を擊鼓宣令しました。

はじめの中、お寺の中でも、こ

のことに対し、迷惑そうな顔をし

たり、露骨な嫌がらせをする友人

もいました。

当初の間、私自身そういう彼等

の態度に対し、どうしようもない不快の情や、怒りの念の、こみ

あげて来たことは定出来ません。

然し、その都度、はじめてあれ

た提案達多品の一節に、身も心も

しびれるように感じた、あの感激

を思い起しては、静かに懺悔をく

りかえしました。懺悔は決して徹

底したものではありませんでした

が、不思議なほど対立感情は消え

て行き、却つて対立を越えること

が出来た喜びさえ、感ぜられるよ

うになつて来ました。何時しか、それまで反対の立場に立つていた人々も、陣頭に街頭を撃散し始め

思えば大聖人は、絶え間なき迫害の中、自他ともに今生の滅罪となり不快の情や、怒りの念の、こみあげて来たことは定出来ません。
私も人として、大聖人につづく確信と喜びにあふれたい、と願うばかりです。

蓋し、自他不二の実践なきところには、減罪の喜びも、成仏の確信も得られるはずはありません。

下種（お題目の種を人々の心田にうえつける）というのは、おこ

まがしいことです。が、本仏教尊のお題目を、私の声を通して、有縁無縁の人々の心に、法界の一切万靈に、お伝えして、私自身のみの成仏でなく、すべての人々と共に

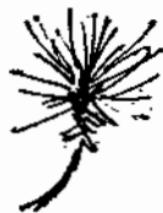
心の蓮華の花を咲かせましょうと

訴え、「共に咲く喜び」を味わつて行くことを、思うのです。

△おわり△

この原稿は、去る十一月三日の「文化の日」、大

阪府堺市の仁徳天皇の御陵のそばの、朝日寺における御会式布教の講話に加筆したものであることをお断りします。



煩惱の渦潮の中に

榎本蓮子



臆病な雑兵

それは川中島の合戦中の出来事でした。武田の軍勢の中に、非常に臆病な一人の雑兵がいました。

彼は合戦が始まるたびごとに、真青になつてふるえ出し、足もすくんで、居ても立つてもおられず

持つていた槍も投げ出して、大地にひれ伏し、頭をかゝえこんで、「こわい／＼助けてくれ／＼」と合戦の終るまで、まるで赤坊

のように泣き叫んでいました。同輩の者も、はじめの中は、
△臆病な奴め△

と、さげすきんでいましたが、合戦の打ちつく中、何時しか、この噂は全軍の笑い草となつてひろまり、ついに信玄の耳に入つてしましました。

信玄は、さうそく、この雑兵を呼びつけました。雑兵は、

へさぞかし、重い罰が加えられるだろう△

とガタ／＼あるえながら信玄の前にひれ伏しました。すると信玄は、怒ると思いきや、却つて雑兵を柔しく励ました。

「合戦はこわい。多くの者が傷つき、多くの者が死んで行く。自分も何時傷つき、何時死ぬか判らない。そう思うと誰でもこわくなる

若し、こわくないという者がおれ

ば、それは匹夫の勇にすぎない。

見せかけの勇気なのだ。

かくいう俺も、全軍の総大将で

ありながら、実は、こわいのだ。

お前と全く同様に、合戦のあるた

びに、心は死の恐怖であるえ出す

然し、それよりもこわいのは戦

さに負けるということだ。万一、

戦さに負けてみよ、自分が殺され

るどころか、領土は奪われ、故郷

に残して來た可愛い妻子も、地獄

の苦しみを受けねばならぬ。

そう思うと、戦さには勝たねば

ならぬ。勝つためには、ふるえて
ばかりはおられぬ。殺されるかも

知れぬ死の恐怖をもつたまゝ、し

やむに戰かねばならぬ。

然し、突撃の合図のあつた時、

俺が何時も勇しく戰うのは、こ
わさを知らぬためではない。自分
が殺されるという恐怖をもさると
ながら、それ以上の恐怖をも知つ
てゐるからだ」

鬼をもひしぐかと思われた信玄
の、この眞実の言葉には、居列ぶ
諸将も、さすがに感うたれていま
した。もとより雑兵は、あふれる

涙に顔をクシャ／＼にしながら聞
き入つていきました。

さて次の合戦の時、かの雑兵は
信玄のこの訓誡にもかゝわらず、
今までと同じようにガタ／＼ふる
えるのを禁ずることは出来ません
でした。

この寸話は、実は私が小学生の
頃、雑誌の中で讀んだことのある
かすかな記憶にもとづくものです
が、もとより誰が書いたのか、筆
者の名前は覚えておりません。
然し挿画には、恐怖におの／＼いた
雑兵の、大地にひれ伏して頭をか
ゝえながら、ブル／＼ふるえてい

こわければこわいほど、固く眼を
つぶり、齒をくいしばつたまゝ、
持つた槍をつき出して、真一文字
に敵陣むかつて、車駄天走りに突
き込んで行きました。それは全軍
に先き駆ける一番槍であつたとい
うことです。

る姿が、面白そうに画かれていました。

蓋し、今にして思えば、幼少の頃の記憶に残る此の寸語の中に、煩惱業苦と対決して行かねばならない仏道修行上、示唆される多大なものがあるようと思えるのです

は出来難いことです。一人で住むということは楽しみのないことですか。むしろ森林は、精神統一を得ていない修行者的心、を奪うものだと思います」

と話しかけました。すると釈尊は、バラモンの恐怖心をあわれんたり、いさめたりするどころか、「バラモンよ、私もまた貴方と同様に、正覚を得ていない以前、まだ悟りを開いていない修行中であつた時には、森林の中で、貴方とバラモンのジャーナソソーニという行者が、釈尊に向つて、

「世尊よ、森林の中に隠棲して、一人で居ることは堪え難いことです。人々から遠く離れて暮すこと

は出来難いことです。一人で住むことは楽しみのないことですか。むしろ森林は、精神統一を得ていない修行者的心、を奪うものだと思います」

た原始林なのです。人里よりは遙かに隔絶した、誰一人として近づかない、野獸、怪鳥、毒蛇のうどめている無氣味な密林なのです。

その森林の中に、一人で住むといふには、たとえ修行のためとはいたとしても、恐怖なしには到底不可能に近いことです。まさに正覚を得ていない限り、密林の恐怖からのがれることは出来ないものなのです。

そして釈尊でさえも、その修行時代を回顧して、密林の中の恐怖におのゝいていたことを述懐されたのでした。

釈尊の恐怖

曾つて釈尊が、コータサラ園の首

都含衛城外の祇陀林（祇園精舎の

林）の中におられた時のことです

バラモンのジャーナソソーニとい

う行者が、釈尊に向つて、

「世尊よ、森林の中に隠棲して、

一人で居ることは堪え難いことで

す。人々から遠く離れて暮すこと

は日本の森林のようなものではな

更に駕尊は、森林の中における自分自身の恐怖心を、如何にして克服したか、ということについて

次のように語られました。

バラモンよ、私は修行時代、次

のようと思つたことがあつた。

△私は特定の夜、則ち半月の十四

日、十五日、及び八日の夜に、園

林の靈域、森林の靈域、樹下の靈

域、等々の怖ろしくて身の毛もよ

だつ所に、修行の座をもうけて、

敢て、そこに留まろう。そうすれば、きっと恐怖とおのゝきを見る

であろう。

かくて私は、その通り実行した

やがて野獸が近づいて来た。怪鳥

が木の枝を落した。風は枯葉を吹

き動かした。そのたびごとに私は△かの恐怖とおのゝきがやつて来る

る。

と思つて、その思いに堪えた。

堪えながら私は考えた。

△一体、私は何故、恐怖とおのゝきを待ち受けているのか？

△むしろ私は、如実に恐怖やおのゝきが迫つて来るがままに、その恐怖とおのゝきを克服すべきではないか？

この駕尊の述懐について、東大教授中村元博士は、その著「ゴータマ・ブツダ」第百頁に次のよう

に述べています。

恐怖とおのゝきを克服することが出来たのだ」

「恐怖心やおのゝきを取り去らうとすればするほど、人はそれに取りつかれる。もう恐怖から逃れる道は無いのだと思つて、それと対決すると、人は恐怖の中に安住することができる。そうすることによつてのみ、恐怖を斥けることができる。われく凡夫のたゞる道——それがまた人間ゴータマのたどつた道であつた」

地震と良寛さん

文政十一年の十一月、越後三条

を中心として大地震が起りました

アツという間に多くの民家は押し

つぶされ、火事は起り、太陽は暗

く、(う)うと風は吹き荒れて、

人々は泣き叫びながら逃げまどい

ました。

さつそく良寛さんのものともお

見舞いの使いが来ました。時に良

寛さん年七十。使いにもたせた手

紙に次のようにしたゝめました。

死なずてながらえて

うちつけに死なば

見るがわびしさ

しかし災難にあう時節には、災難にあ
ぬる時節には死ぬがよく候。

これはこれ災難をのがるゝ妙

法にて候。

地震の大惨状をまのあたりにし

た良寛さんは、

へ私のような年老いた世捨てびと

の、しかも一人暮しの者こそ、災

害にやられて、うちつけに死んだ

がよさそなものののに、死にも

せず生きながらえて、却つて家族

ずれの多くの若い人々が、こうい

うむごたらしい災害にあうのを見

なければならぬとは、何とつら

い、わびしいことだらう

「災難にあう時節には、災難にあ
うがよろしく候。死ぬる時節には
死ぬがよく候」

と、不慮の災難や、さけ難い死

に対する諦観のほどを教えられて

いるのです。いや、こうした諦観

があればこそ、羅災者の身にもな

り替りたいほどの思いやりにじ

むのでしよう。

誰でも災難はのがれたい、死は

まぬがれたい、と願わない人はあ

りません。

然し、何処へ逃げても、災難や

死からまぬがれることは出来ない

と覚つた時、はじめて正面から災
難に立ちむかい、死中に活を求める

ことが出来るのです。

生死の流れにさかわらず、その流れの中に、生死を越ゆる不滅のいのちを見出すことが出来るので

しよう。

身をしてこそ

浮ぶ瀬もあれ

という通俗的な諺もありますが

目もそむけたい無尽の煩惱、おゝいかくしたい無量の罪業、それを卒直に、赤裸々に認めるところにはじめて救いの道が開けて来るのではないでしょうか。

天晴れぬれば
朝寝、夜ふかしの人に、夜の暗さ、わびしさも知らず、また日の出の雄大さ神々しさも知りませ

ん。たとえ理窟では判つてゐるようではあつても、実感はともなわないはずです。

シン／＼たる長き夜の寂寥に堪

えた人にのみ、嚴肅なる夜明けの太陽の尊さを感じることが出来る

ものです。

それと同様に煩惱業苦を痛感する人にのみ、菩提の尊さを味わうことが出来るのではないでしようか。

多くの人々は、煩惱の業苦よりもがれようとして、色々な方法をこうじます。然しその殆どは、苦に代うるに苦をもつてしている現状です。

日蓮大聖人は觀心本尊鈔の中で

天 晴れぬれば

がれようとしても、所詮のがれることは出来ません。のがれようとすればするほど、ます／＼苦しみは増すばかりです。

内村鑑三は求安録の中で、

然らば我れは何なるか

夜暗くして泣く赤児

光ほしさに泣く赤児

泣くよりほかに言葉なし

と述べていますが、自分の計らいではどうすることも出来ない罪

悪深重なるその身そのまゝを、御

仏の方へ投げ出す時、はじめて御

仏の方から、救いの手がのべられ

なのです。

地 明かなり

と仰せられています。夜は如何に長く暗くとも、ひとたび太陽があらわるれば、夜の闇は消えて行きます。

夜の闇を消して、太陽を仰ぐのはありません。闇と闇と認め、その闇夜の中に太陽を仰ぐのです。煩惱の闇を払つて、御仏の光りを仰ぐではありません。煩惱無尽のまゝ、罪けがれのまゝに、御仏の光りを仰ぐのです。いや、それしか道はないのです。

川中島合戦の折、武田軍勢の難兵は、恐怖におののきながらも、敵陣深く突つ込んで行きました。良寛さんは羅刹者にオロ／＼し

ながらも、災難の中に、災難の苦しみからのがれる道を教え、死の

恐怖の中に、死を越えて久遠に生きる命を説かれました。

そして称尊できえも、ブツダガやの菩提樹のもとで、恐怖とおのゝきの中に、無上正覚を成せられたのでした。

信仰する者にとって、最もいまむべきことは、信仰そのものをもつて、自己を飾ろうとする惰慢な心ではないでしょうか。

罪を認めまいとする惰慢、救われなくともいゝという惰慢、人の

苦しみを我が苦しみとも感ぜられない惰慢……こうした数かぎりもない惰慢心があつては、信仰の門

はくゞれません。

然し、その惰慢をも認め、惰慢のものにも罪の意識をもつ時、既に通は開かれているのです。

煩惱の渦潮さかまくその身そのまゝ、御仏の方へ投げ入れて、御仏の方より呼びかけられた南無妙法蓮華経の声に、あたかも子を呼ぶ母親の、声に応ずる子供の如く

御仏を親と慕いて南無妙法蓮華経とこたえるところ、まさしく煩惱の苦惱も苦惱ではなくなつた、

新しき人生の夜明けではないでしょうか。

△完△



続・美女と求道者

芋　　畑　　の　　中　　で

身延山大学一年仲穎隆

先月号の「美女と求道者」は、意外な反響を呼び起してしまいました。

した。身延山の学校でも、麓の身延の町でも、あう人ごとに、

「美女と求道者は面白かつた。あの統きは一体どうなるのだ」

と問いかけられるのです。これには私の方が却つて面くらうてしましました。然し、いくら問われ

ても、私に解答の出来るはずはありません。

思い出しても「らんなさい……」

……旅僧が野原の中の一軒屋に泊

つた。老婆と娘がいた。一夜、娘は老婆のいつけで旅僧の夜伽ぎに出た。旅僧は真青になつてこばんだ。すると老婆から帯でなくなりつけられた。「この生兵法者、修

行して出なおせ」と啖呵されて、……日高上人の説明によると、それは小乘的な始覚法門の破折であつたという。

その後、数年を経て、旅僧は再びその家に泊つた。今度は娘を抱いた。すると老婆から、また帯で減多うちぶんなんぐられた。「この生臭坊主、二度と姿をあらわす



な」と怒号されて……それは観心
すわりの自然主義的本覚法門の破
折であつたという。

この話の直後、

「お前たちが、この旅僧の立場で
あつたならば、一体どうする？
娘を抱くか、抱かぬか」

と日高上人に問いつめられた。

私達は冷汗三斗の思いをした。や
つとの思いで、

「娘に向つて南無妙法蓮華經と唱
えます」

と答えると、日高上人はニタリ
と妙な嘲りをされたのですから。

その後、本妙庵の学生三人は、
この問題について随分と語りあい

ました。薪をとつたり水をくんだ
り、炊事をしたり風呂をたきなが
らも、考えつゝけて来ました。
美女を抱くか抱かぬか——それ
は血氣盛んな青年にとつては、或
は興味シン／＼たる愉快な課題で
あるかも知れません。

然し、私達は真剣でした。大真
面目に考へざるを得ない問題でし
た。何となれば私達自身、同じ仏
者として、その巣頭に立たされて
いるのですから……。

また、美女の抱擁を受け入れた
という旅僧の、観心すわりな自然
主義的本覚法門の態度というのは
煩惱に対する反省も呵責もなく、
従つて修行も実践も更になく、觀
念的に煩惱も天地の恵みとうけと
つて、むしろ煩惱を讃美する行き
方であり、煩惱即菩提という言葉
を、仏陀の立場でなく、凡夫の立
場で、そのまゝ認めているようなもの

もかえりみられないことであり、
たとえば高根に輝く真如の月を仰
いで、人を伴う余裕すらなく、む
しろ人を払いのけても、蟻々たる

煩惱の峻険を、血みどろになつて
一人よじのぼつてゐるようなもの
なのです。

ものなのです。

前者は超人的であり、後者はあまりにも人間的です。然し、その両者とも間違つているというのであれば、

「女をこばむのに、こばみかたが問題なのかも知れない」

「いや抱きかたなんだ。抱くのはいい。然し、抱擁の仕方に問題があるのだろう」

と三人で、色々と所作を考えて

みたこともあつたほどです。いや笑わないで下さい。私達は真剣にこの問題を取り組んでいたのです

若し、あなた方が旅僧と同じ立場におかれたらしたならば、あなた方は一体どうされますか。矢張り

考えざるを得ないでしよう。

なか／＼これという解決は、つきそうにもありませんでした。い

くら日高上人に尋ねてもフフンと鼻さきで笑われるだけでした。

こうした或る日、霜がおりない中に、ということでお本妙庵の畑のサツマ芋を掘ることにしました。

本妙庵は三反歩にばかりの畑があります。色々な野菜を、学習の

あります。春にうえたサツマ芋の芋ずるは、畑一面にひろがっていました。

鍬を入れると、芋ずるの下から

ブーンと臭う土の香りと共に、大きな大きな芋が、まるで赤ちゃん

の頭ほどもあるような大きな芋がゴロリ／＼ころがり出ました。

「でつけえなあ」

「すこいなあ」

皆、小踊りして喜びました。それは丹誠して耕作した者の喜びでした。

「今夜のおかずは、芋のテンプラにしよう。イモテンだぞ」

「芋ばかり食つてると、本妙庵はガスだらけになる」

どつと笑いが起りました。そして喜々として作業をつづけている

中、ふと日高上人が高々と片手にさしあげた一番太い芋をニコニコながめながら、芝居気たつぶりに

大きな色声をはりあげて言いまし

た。

「芋がさゝやいている」

「芋が笑つていてる」

「芋は我れにさゝやき、我れもま

た芋にさゝやく」

「芋は我れにほゝえみ、我れもま

た芋にはゝえむ」

私達はゲラ／＼笑い出しました

これに勢いすぎてか日高上人は、

一段と大みえを切りながら、声を

はりあげました。

「あゝ芋が我れなるか、我れが芋なるか」

「……天地は芋に輝き、芋にかぐわし……」

誰かが半聲を入れました。ブウ

ツというオナラの擬音でした。

爆笑が起りました。それにもめげず、

「今や天地は、天上天下、芋だらけ。法界は芋の淨土。芋の大マン

ダラ……」

とセリフがつゞきました。もう一人の学生が、すかさず、

「法界はイモマンである」

と真似ました。爆笑に爆笑、芋

畠の上を笑いころげるほど笑いが

とまりませんでした。日高上人も

腹をかゝえて笑つていましたが、

ふと真面目な顔をして、

「今の俺のセリフの中に△美女と

求道者▽の問題の解決点がある」

と言わたのです。

その夜、イモテンの夕食もすんでから、日高上人は次のように語られました。

女を抱くか抱かぬか、というこ

とが随分問題になつたようだが、

たとえ女から、

「親もすゝめるので抱いてくれ」

と申し出られても、愛情もない

のに野合する馬鹿が何処におるか

まして相手は女郎ぢゃない。堅気

の家の一人娘だ。こちらも修行の

身、まして旅の空。若し仮りに抱

いたとして、万一、子供でも出来

たら何とする。子供はテテナシ子で育たねばならない。その責任は

誰がとる。常識で考えてみても、

その場で女は抱けぬはずである。

それぢあ最初のよう、女をこばんだ方が正しいのかといふと、この時、旅僧は老婆から叩かれてゐる。何故か。それは旅僧が衆生濟度という大慈悲心のカケラもなく、自分一人救われようという独善におち入つていたからだ。

そもそも、「美女と求道者」という物語りの中には、求道者が美女を抱くか抱かぬかといふ、二者択一のワナが、はじめから設けられていた。駄野の中の一軒屋という設定、その家に老婆と娘しかおらず、娘が都にも稀な美女であつたということ。(若し老婆が爺々であり、美女が醜女であつたなら、

事態は随分変つて来る)その上、

ねばならなかつたのだ。

旅僧が通された部屋は、母屋から庭をへだてた別棟の一間、そこに旅僧は数日も留つておらず、その間美女は三度の食事を運んでおり、

抱くか抱かぬかというクライマックスは、こうした設定のもとに、いよいよ、ぬきさしならぬ二者択一の場へと追い込んで行つてゐる。

ところが、これがワナなのだ。老婆は娘を介して、はじめから意識的のワナをしかけて來ている。「あなたのためになら、如何なる奉仕でも惜みません」

とか、中には、「身も心も捧げます」

というような者までも現われてしまふ、ワナにかかると筈でなくなりつけた上、啖呑している。

旅僧は、美女が夜仰きを申出た時、へ「これはワナ!」とすぐ気付か

お前たちも、そうだ。ワナと氣付かずにワナに落ち入り、女を抱

く、抱かぬと、一方にとらわれた大騒ぎを起している。

ある。みずから行じてもしないでそれを人に供養や奉仕によつて押しつけるところに魔性が起きており、これがこうじると獅子身中の虫となつて来る。

鉄は内からさびて来る。仏法も

また外敵には倒れず、内部の腐敗より衰微して行く。

信徒をよそう人の甘言には注意せねばならぬ。ワナにはからぬよう、はじめからそれを見抜かねばならぬ。

仏法は有無の二邊、断常の二見をしりぞける。いずれの極にも落ちてはならぬ。

仏法は中道の実践を宣揚する。

求道者の場合、美女をしりぞけて

もならぬ、抱いてもならぬ。しりぞけるでもなく、また抱くでもない立場、そは一体いかなる立場ぞ

……いわく中道実相。中道実相とは天地の円融をいふ、自他の不二を示す。

芋畠の中で、芋は私にさゝやいた。芋は私にほゝえんだ。芋が私か、私が芋か、芋に対する私の親愛の情は、天地一杯にひろがつた。天地には円融の無上価値がある。その円融価値体の中に、同価値の芋と私が、不二の情に結ばれていた。

旅僧にしても美女にしても、男女の別これあれ、本仏よりみれば同じ仏子であることに変りはない。若し旅僧が、我れも仏子、美女も仏子、同じ円融価値体の中で、仏陀に護念されているという境に立ち、彼女に対して終始変らぬ大いなるいくしみの心をもつていたならば、おそらく抱く抱かぬといふ二者択一のワナにおちいらなかつたことだろう。

仏陀は、天地円融する実相、無上価値を体現された。それを体現されればこそ一切衆生、事々物

々にまでも悉く是れ我が子なり、という大慈悲心をそゝいでやまなかつた。

腹を抱きしめようということもな
く、またお前たちの一人が、額に
青筋を立てながら美女に対して、
南無妙法連華經と威猛高かにお題
目を唱えるといったようなことも
なく、同じ仏子として、老婆もふ
くめて、三人ともに、仏陀の大慈
悲の中に生かされる身を感謝しな
がら、唱題三昧に自受法樂すると

る人々に対してとも、また自分に
敵する人々に対しても、あうた
びことに、今生たゞ一度のめぐり
あいという心で、最高の交流をは
かることである。

この心がけは、僧侶といわず、
在家といわず、日常茶飯時、親子
の間においても、夫婦、兄弟姉妹
乃至は友人知人の間においても或

は道に行き交う人々の間において
も、常に堅持しておらねばならな
い。これを堅持するのが、信仰の
実践なのだ。

いや、法華經の信仰をしておれ
ば、一期一會の心がけも、敢て心
を勞せず、自然に湧いて来るもの
ばならぬ。

一期一會とは、よく顔をあわせ
である。

人生万事一期一會——この一會

が、共に、互に、合掌し、敬いあ
う但行礼拝、唱題の一會でありた
いものである。憂悲苦惱の種を残
さず、むしろ法界円融、真如実相
の無上価値体である久遠本仏の、
叡知と慈悲のこもれるお題目の種
を、隨所に留め残さねばならぬ。

ようやく日高上人のお話しは終
りました。波木井山頂にたゞすむ
本妙庵の夜は既にふけていました
半月は中天にかかり、星はまたよ
き、眼下に合流する富士川と波木
井川の流れが、夜のとぼりの底に
白い帶の如く光っていました。

へおわり▽

宗門蘇生の要道とは

解 説 日 高 白 象

お た ず れ

今日、ロケットは月世界にも達するという物質文明の急速な進歩に対しても、人間の精神文化は、むしろ退歩しているという酷評すらなされています。

こゝに人類の危機があります。

この危機を乗り越える道は、もはや宗教以外にはない。宗教の中でも仏教、仏教の中では法華經、法華經の正脈をたもつものは日蓮宗といわれているのですから、今こそ日蓮宗は、打つて一丸となつて立正安國の大義を全世界に宣揚しなければならない、といわれています。

然るに、創価学会をはじめ低級な現世利益を目的とする新興宗教の勢力は、なお依然として衰えずむしろ日蓮宗よりも着実な進展をみせており、これに対して日蓮宗は旧態依然、なおその因襲より脱皮することも出来ず、ようやく興つて来た宗門青年僧を中心とする青年活動も、独善の淵にさまよって、大衆に直結出来ずにいるという状態であり、まことに慨嘆のほかないかもしれません。

かかる時、鷺峰会が立つて宗門内外に新風を巻き起しました。鷺峰誌を通し、街頭布教を通して、祖道復興の範を身をもつて天下に示しました。

私は、驚峰会こそ宗門改革の要

路に立つものであり、その中には

宗門蘇生の妙手がひめられている

と信じます。

どうか、それを公開して下さい

私も及ばずながら全力をかたむけ

て協賛し、この運動を通して世界

平和につらなる喜びをわかつたい

と思います。

おこたえ

驚峰会に対して、大へん御期待
下さつて、まことに恐縮に存じま
す。

然し、驚峰会は宗門を改革しよ

うなどと、大それたことは夢にも

考えたことはありません。従つて

宗門改革の妙手といったような術
策のもあわせもありません。

たゞひたすら仏祖の道を尊び、
これに従つて行く、という人々の
集りが、仮りに驚峰会という名称
を用いているにすぎません。

蓋し、宗門の堕落、沈退、因襲
姪卑なる根源は、如何に口には法
華經を誦詠し、題目修行を重ね、
御遺文を講讀し、且つはお寺参り
も欠かさず、遠く宗祖の靈跡を巡
拝するとはいっても、それは形ば
かりのものであつて、心から仏祖
一乘の道を尊ぶことはなく、劫つ
て惡宗祖をしく敬い、現状はむし

ますまい。

皮肉なことに、大聖人が禪天魔
と破壊された禪宗の、永平道元禪
師は次のように門人を諭めていま
す。

行者自身のために

仏法を修すと思うべからず

何に寺門の運営、宗政の改善を計
り、福祉事業や青年会活動を活発
化させてみたところで、所詮、砂上
の楼閣にすぎません。そういうと
ころに仏法はないのです。

若し、宗門改革の道ということ
を敢て論するならば、それは身心
をあげて、仏祖の道を尊び、これ
に従つて行く、というほかはあり
ません。

名利のために

仏法を修すべからず

果報のために

仏法を修すべからず

靈験を得んがために

仏法を修すべからず

たゞ仏法のために

仏法を修する

すなわち是れ道なり

また禪師は、このようにも述べ

ています。

諸仏・菩薩に

隨喜せられんことを思い

成せんことを思うも
仏果菩提を

我欲名利の心

なお捨て得ざる故なり

ところで現在の宗門人の中に、

禪師に嘲われないような修行をし

ている僧侶、檀信徒は、果して何

人いることでしょう。

宗門改革の妙手、そんなケチな

考えはおすてなさい。脚下照顧、

たゞひたすらに仏祖の道を尊び、

身心をあげて、これに従つて行く

ということ。それ以外なものも

ありません。これが根本であり、

正法興隆、宗門の蘇生というのも

その上において、はじめく咲く花

なのです。

大聖人は、觀心本尊玆の中で仰

せられました。

妙法蓮華經の五字に具足す

このお題目を受持する以外に、
更に何をか求めべきものがありま

しょう。正法興隆にしても祖道復

興にしても、所詮、凡夫の力の及

ぶところではあります。本仏釈

尊照鑑のところ、お題目がお題目

の力によって、はじめて成就する

ことが出来るのです。

仏陀は御入滅のまきわ、仏弟子

たちに對して次のように遺諒して

います。

汝等 たゞ自らを光明とし

自らを依處として

他人を依處とすることなかれ

法を光明とし

他を依處とすることなかれ

法華經講鑑の集い

講題
生死をこゆるもの

久遠のいのち ▼連続講義▼

——その時と人と教と国について——

講師
鷺峰主幹 日高白象先生

会場
横浜市南区井土ヶ谷中町一六一

大乗物産株式会社（代表：猪瀬秀成氏）

電話（七四）〇七二四番

道順
京浜急行（横浜より各停電車）「井土ヶ

谷」駅下車、改札口を出て右へ約二十米
パチンコ屋の隣りのドアを開正面階段
を上る

誰でも自由、会費不要

参加
性格
この集いは、法華經信仰の真実と、その
実践を求むる人々の、自由な集いである。

十二月八日は大聖釈迦牟尼世尊が、中印度のブツダガヤ、尼連禪河のほとり、菩提樹のもとで、夜明けの明星を仰ぎながらはじめて悟りを開かれた聖なる日です。仏教徒は、この聖日を記念して成道会を厳修しますが、中には十二月一日より一週間、蠟八接心といつて釈尊の往時を偲ぶべく釈尊の如く断食修行をする人々もいます。身延山では昭和三十二年度より日高主幹の指導のもと身延山学生有志の発意により蠟八唱題修行が上ノ山の丈六（釈尊）堂において始められ、これを契機として学生の自主的街頭布教が起り、更にこれを母体として昭和三十五年正月以来、身延山自体の街頭布教が全国的に展開されるに至り、大いに宗風を宣揚して来ましたが、蓋しこの街頭布教が、釈尊成道会より起つたということには留意すべきであります。

日蓮大聖人の門下たる人々、何人といえども十二月八日は必ず夜明けの明星と御来光を仰ぎ、釈尊成道の昔を偲んで、信心の決定と、広宣流布につらなる菩薩行実践の誓願を新たにしなければなりません。

編集後記

鷺峰十一・十二月号

昭和四十一年 第四卷 第六号
通巻 第三十一号

定価 五十円 送料二十五円

昭和四十一年十一月五日 印刷
昭和四十一年十一月十日 発行

編集兼発行人

山梨県身延町波木井三区醍醐本妙庵

日高白象

印刷所 山梨県身延町梅平

藤田印刷所

発行事務所

山梨県身延町波木井三区四一二五

鷺峰会

電話(身延山)四五九番
振替(甲府)二〇九三番

誌代

半年分 四五〇円
一年分 九〇〇円
一年分 三〇〇〇円
(送料共)
(分納可)

○本誌代について
★印刷代があがり郵送料もあがつた。休刊の分もあわせて読者の誌代を通算整理する。

○本年こそは
★これまで鷺峰会の仕事が多すぎた。出来るだけ仕事をさして、集中的に本誌の内容充実と、定期発行に専念する★本年の御協力を感謝し、本年も一層の御支援を懇願する次第であ。